日本宣言

竹葉秀雄

（一）紀元節について

（昭和四十年二月）

日本の国の肇まりについて、それがいつであるか知る者はない。

だから、紀元節をきめるのはよくないと、反対論者は言う。

それだけ、とにかく悠遠な国なのである。神ながらに、自らに（おのころ島の名のごとく）出来てきた国である。

宇宙の理法のまにまに生成してきた。だから、宗教も道徳も哲学も物理も芸術も混然一体、国そのものとなっている。神話と歴史とが、理念と事実とが、内と外とが融然未分化の状態にある。

ここに、尊い真実の国、理法の国、日本が湧出しているのである。

そして、それは、口伝として伝誦され（文字のないとき記憶力は非常に強く発揮される）または、神代文字で記せられて伝えられていたのであるが、聖徳太子は、学問を興し、修史の志を立てられ、過去･現在･未来を達観してあやまらない一貫した体系を記し、国体を明らかにし、建国の理想を知らしめて、国民の自覚のもとに「和を以て貴しとなす」大和国日本の道を確立しようとされて、天皇記国記編纂の業がなされたのである。そして、この志は、太子の十六歳の時、上宮の御学問において起稿されたのであるが、その建国について、「国を肇める」という文字を使っていられる。この肇という字は、戸を明け始めたところ出入り絶えず、閉めることが出来ないという字で、肇められた国日本の永久に終りないことを意味しており、「天壌と共に窮まり無かるべし。」という、真実の国、理法の国、日本の国格を観得把握されていられたものと思われる。

太子は、修史は絶対に正しくなければならないとされ、その史料の蒐集には最大の努力と費用をかけられ、また、百済、新羅、高句麗、任那、隋からも、惜しみなく資料を得られ、屢使を筑紫、難波の国庁、鴻臚館にやって、両国の伝の相異するところについては、その正伝を期せられたのであった。

こうして、推古天皇の二十八年、三十余年の長年月を傾けて、天皇記、国記が完成され、大臣馬子も亦、臣、連、伴造、国造の宝記と、公民本記を完成して、日本修史の業が始めて出来たのである。「史は鑑なり」で、正しい記録によって政治を反省することである。単なる著述とは違うのである。太子はこの大事業のために身命を尽くしきられたかのように、この業を終えられた四十七歳、身体の衰えが見えはじめて翌々年の二月二十二日の夜半、四十九歳をもって薨去されたのである。

天皇記、国記は、草案のままで蘇我氏の家に保管されてあったが、皇極天皇の四年、中大兄皇子、藤原鎌足によって蝦夷入鹿が誅せられた際、蝦夷はその邸宅に火を放って自殺したので、惜しい哉、此の貴重な資料も焼失したのであった。然し船恵尺が、その焼け残った国記を救い出して、中大兄皇子に奉った。これが、後に、古事記、日本書紀の編纂に有力な資料となったこと、また、この学問調査研究がその後の日本修史の業に大きく役立ったことは申すまでもないことである。

暦は、推古天皇の十年に、百済の僧、観勒が来朝して、暦本、天文、地理書等を献じたのを、太子が天皇に奏して、直ちにこの暦を採用し研究し、日本の暦年が探求されたのである。これによって日本の国史が年代をもって編纂され、古源が推究されたのであるが、実にこれは困難なことで、その苦心努力はなみたいていではなかったと思われる。推古天皇の諡号が奉られたのも宜なる哉と思われる。

古事記の序にも「朕聞く諸家のもたらしたる帝紀及び本辞既に正実に違ひ、多く虚偽を加ふと。今の時に当りて、その失を改めずば、いまだ幾年を経ずして、其旨滅びなんとす。斯すなはち邦家の経緯、王化の鴻基なり。故惟に帝紀を撰録し、旧辞を討覈して、偽を削り実を定め、後葉に流へまく欲すと宣りたまひき」とあるように、天武天皇の御意思も、聖徳太子と同じく、その正実を期せられたのである。天武天皇の志をお継ぎになった元明天皇は和銅四年九月十八日を以て、安万侶に勅を下されたのである。「謹みて詔旨に随ひ、仔細に採り摭ひぬ。然るに上古の時、言意並に朴にして、文を敷き句を構ふこと、字には即ち難し。已に訓に因りて述ぶれば、詞心に逮ばず。全く音を以て連ぬれば、事の趣更に長し。是を以て今或るは一句の中、言訓を交へ用ゐ、或るは一事の内、全く訓を以て録しぬ。即辞理の見え叵きは、注を以て明にし、意況の解き易きは更に注せず云云」と安万侶も述べ伝えんとしたのである。

日本書紀は、天武天皇が、その十年、前述の趣旨によって、川島王子、忍壁王子、広瀬王、竹田王、桑田王、三野王、上毛野三千、忌部首、阿曇稲敷、難波大形、中臣大島、平群子首等の諸王、諸臣をして編纂にあたらしめられたのであるが、業半ばにして、川島、忍壁の二皇子が薨去せられて一頓挫し、元正天皇の御代にいたって、舎人親王を修史の総裁に任ぜられて、養老四年、古事記におくるゝこと八年（西暦七二〇年、神武暦一三八〇年）にして全三十巻の完成を見た。

神武天皇の紀元は、このような厳正なる調査研究によって定められたもので、即ち推古天皇の御即位九年が辛酉であり、それから、一千二百六十一年を逆算して見ると恰度二十一回前の辛酉にあたったので、日本書紀に「辛酉の年の春、正月の庚辰の朔の日、天皇、橿原の宮に帝位に即き給ひき。是の歳を、天皇の元の年と為す」と記しているのである。

これについて、否定するのは第一那珂通世博士達で、その著「上世年紀考」に当時の中国で唱えられた讖緯学（後漢時代に流行した、天変地異などによって未来の吉凶禍福を占う学）の辛酉革命説によったものとしている人達。第二は、神武天皇から第九代開化天皇までの天皇の歴史的事蹟が記述されていないし、御年百歳以上の方が六皇、（古事記、日本

書紀で十一皇ある）もおいでになるということ、第三に、崇神帝は神武帝と同じく「ハツクニシラススメラミコト」であるということ。

第一の否説については、無理に讖緯説をもって来なくても、推古天皇の九年が辛酉であって、それから推古して一二六〇年前に神武天皇の御即位があり、その年が辛酉にあたっていたと、素直にとってよいではないか。また、たとえその年が不明であったが故に讖緯説によったとしても、それほどの意義を思考して決定した精神と見識をわれわれは大事にしてよいではないか。当時でさえ不明であったそれほど悠遠な歴史なのである。そして民族の理想精神は正しくかくあったのであるから。

第二の問題は、古事記には天皇の御事業については書いてはないが、御名も御后も御子も御陵も御年も皆書かれてある。詐り為にするすべをもってこのようなことが出来るものではない。今の世の人に濁れる心をもって、古の心正しく赤く清けき人達を今の自分と同じように考えることはつつしまねばならない。日本民族が安らかに生活したのは、東海の島で大体一民族が安寧な生活を営んでいたので、何も故意に年代など延ばす必要はない。また不明は不明としたので、若し、強いて詐る考えで書かれたものであれば、歴代の天皇に立派な色々な事蹟をつけることも出来たであろう。日本書紀は一書に曰くと他の書のことまで附書して客観を重んじているが、このように真実を求めている努力を見るべきである。年齢に百歳を越えられた方のあるのは問題ではない。古事記日本書紀其他の書との多少の違いのあるのも当然で、そこにそれぞれの研究が重んぜられている。根本に於いて、大体に把握し、そこにある真実を知ることが大事なのである、私の家の系図でも事績の多くかかれている祖先もあれば、名前だけのものもある。神武天皇の雄大なる建国の御事績のあと、これを継持保守された時代であると見るべきではあるまいか。

第三の点は、同じお名前はいくらでもある。神武天皇は、神日本磐余彦また、諱（ただのみな）は彦火火出見とあるが、御祖父もまた彦火火出見の尊と同じである。このようなところに捉われることはない。

疑えば、昨日したことだったって疑えるし、否定すれば、今日の事でも否定できる。研究は、個々自由に精進してよろしいが、これらの祖先の古道を伝え、編纂された歴史に対してはよく根本的なるもの、その貫一した精神を把握することにつとめて、そして、謙虚な態度をもってこれに対すべきである。例えば、日本書紀の神武紀の中にある「天つ祖の降りまししより以逮、今に一百七十九万二千四百七十余歳なり。」とあるのを、これだから日本書紀は出鱈目で一笑に附する価値もないという人もいるが、昨年（一九六四年）の三月四日 UP＝共同は「これまで最古とされていた人類の始祖はジャワ原人（六〇万年前）より百二十五万年も古い人類の化石が東アフリカのタンガニーカで発見された。発見者は、英国の考古学者リーキー博士夫妻らで、四月ワシントンでこれを発表したが、人類学のうえで、歴史的な重要性をもつものとして注目されている。･･･この発見はリーキー博士の著書も含めて〝人類学の教科書を書き変える〟ことになりそうだ」と記載した。百八十万年以前に人類が存在したことが明らかにされようとしてきたのであって、この湿気が多く、

あしかびのくに日本に、古代人類が早く生息していたことは考えられてよいことであるし、たゞ地震の多い国なので埋没したことも考えられてよいのではないか。一百七十九万二千四百七十余年は、一笑に付すべきものでなく、われわれは、古事記・日本書紀などに述べられていることは、敬虔な心をもって出来るだけこれにそってこれを解すよう努むべきで、個人の浅見で直ちに否定するが如きは、潜上的な卑しむべき心情と嘆ぜざるを得ない。

推古天皇、聖徳太子をはじめ、和銅・養老年間の天皇及び使臣学者達が、修史の大業を志して、天皇記、国記、古事記、日本書紀を編纂したことは、日本民族の国家的自覚によることで、悠遠ではかりがたき古を探究して、渾然としていた神話と歴史とに神武天皇をもって劃りを立て、それ以前を神代神話の時代であるとし、神武天皇を第一代として歴史の初めにおいた、この学者的良心とその研究努力と見識に国民は敬意と感謝をもつべきではあるまいか。そして、このようにして定められたこの神武紀元を尊重し、大いにこれを祝すべきではあるまいか。

その日本国建国の精神は、神武天皇が御年四十五歳の時、御兄弟御子達に「昔、我が天つ神、高皇産霊の尊、大日霊の尊、此の豊葦原の瑞穂の国を挙げて、我が天つ祖、彦火の瓊瓊杵の尊に授け給ひき。ここに彦火の瓊瓊杵の尊、天の関を闢き、雲路を披け、仙蹕を馳せて戻り給ひき。是の時に、運は鴻荒に属ひ、時は草昧に鐘れりき。故、蒙しくて正しきを養ひ、此の西の偏を治らしめき。皇祖皇考、神にしてまた聖にましまし、慶を積み、暉を重ね、多に年序を歴たり。（天つ祖の降りましし より以逮、今に一百七十九万二千四百七十余歳なり。）而はあれども、遼邈なる地、猶いまだ王沢に霑はず、遂に邑に君あり村に長あり。各自彊を分ち、用ちて相凌蹀せしむ。抑又、塩土を老翁に聞けるに、東に美き地あり、青き山四に周れり。其の中に亦、天の磐船に乗りて飛び降る者ありと曰しき。余謂ふに、彼の地は必天業を恢弘し、天の下に光宅するにたりぬべし。蓋し六合の中心か。厥の飛び降りし者は、謂ふに是饒速日か。何ぞ就きて都せざらめや」と宣り給うたところ、皇子は「理実灼然なり。我も亦恒に念と為しつ。宣早に行ひ給へ」と答えられたのであるが、ここにこそその精神を見るべきであり、ここにこめられている精神こそ、日本建国の大精神である。「正しきを養ひ」「慶を積み」「暉を重ね」て、「天業を恢弘し、天の下を光宅する」のである。天の業をひろく大いにするのであり、地上を光にみたすことである。神のみ心を地上に成すことである。更に、大和に都を経り給わんとして「我東を征ちしよりこゝに六年なり。皇天の威を頼りて、凶徒就戮さえき。辺の土いまだ清まらず、余の妖尚梗しといえども、中洲の地に復風塵無し。誠に皇都を恢廓めて大壮を規り摹るべし。今運此の屯蒙に属ひ、臣の心朴素なり。巣に棲み穴に住む、習俗惟常となれり。夫大人の制を立つは、義必ず時に随ふ、苟も民に利きことあらば、何ぞ聖の造に違はむ。且山林を披き払ひ、宮室を経営りて恭みて、宝位に臨みて元元を鎖むべし。上は乾霊の国を授け給ひし徳に答へ、下は皇孫の正しきを養ひし心を弘めむ。然して後に六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇を爲さむこと、亦可ならずや。夫の畝傍山の東南の橿原の地を観れば、蓋し国の奥区か。治らすべし。」と令を下されている。義は時に随うべきもので、民の

ために利(よ)きことであれば、それが聖(ひじり)（日知る、太陽精神）の道にかなえるのであるとせられ、民は大みたからであり、それを鎮め安んずるための「たかみくら」である。こうして、天つ神が皇孫に委された御うつくしみに答え、また、皇孫が正を養い給いし心を弘めよう。と、かくして、六合を真の文化の都（光宅であり、真善美の世界である）とし、八紘を一家のような和楽の世界としようと志されたのである。志業がなければ真の国家とは言えない。欲望で制約契約した国は商業取引の市場に過ぎぬ。すぐれた民族は崇高なる理想を抱き、志業を立てる。ここにこもっている日本建国の理想こそ崇高荘厳なる大精神である。更に遡れば、この精神は、天照大神によって示されている太陽精神であり、天之御中主神、高御産巣日神、神産巣日神に把捉されている宇宙精神から発している。真実であり、理法であり、光輝なるものである。

この宇宙･太陽の精神に随い、元元(おおみたから)を鎮めて各民族と各個人の文化の花咲く大和世界を建設しようと、民族の大自覚によって国を肇められた、そのときを神武紀元としたのである。何というすばらしいことであろう。日本国民よ！小児病的なものを払拭して、父祖の抱いた大志雄図に甦れ！そして、未来に向おうではないか。神武を紀元として祝するに何のためらいがいろう。この日を祝して、祖先を偲び、悠遠荘厳な国家民族の理想を仰ぎ、その志を継いで、天下を和楽せしめようではないか、この日こそ国家民族の祝日となすべきものである。

なお、二月十一日を紀元節と定めたのは、明治政府が、明治五年十一月に旧暦の太陰暦を太陽暦に改め、太政官布告で「来る十二月三日を以て明治六年一月一日と被定候事」としたので、その年は一月二十九日に最初の紀元節が祝われた。天皇から勅語を賜って君臣ともに慶び歓を尽したのであった。翌明治七年には、更によく検討して、神武天皇の御即位まで遡って計算した結果、当時の一月一日が二月十一日に当ったので、爾来明治･大正･昭和と戦後紀元節を二月十一日として、此の日を祝ってきたのである。

この日がよいのである。天下の春、大和世界の魁けとして、梅花もこの日は発くのである。

紀元節祝日の制定を徒にあげつろうて反対する人達に

さかしらに　魂(しこ)の奴(やつこ)の　あげつらひ　草木物言ふ　世よりおとれる

(二) 祝日本建国

（昭和四十一年二月）

私達は如何なる国の建国よりも日本の建国を尊い美しいものと思う。そしてそれは宇宙の理法のまゝに自からに生成されたものであると思う。量り知れない悠久の古から神ながらに生まれ出て来た「ひのもとつくに」なのである。諸法実相の国日本なのである。

むらくもは　かかるもよしや　天つ御空　日のみ光は　かゞやきてをり

此度の日本の敗戦をもって、天照大神には何の力もないと論じたり、天照大神は日本に不在なのだと言う連中、宗教団体もある。我々は、天照大神の御神徳を開弘する民族なのである。神や仏のお蔭をのみ求め、それが与えられないと勝手に早合点して、そんな神や仏はあるものかと捨て去るような連中とは違うのである。此度の敗戦によって、日本人としての真偽が明らかになった。日本自身の修理固成からやりかえねばならなかったのである。今の日本の混乱はそのためである。やがて、天之瓊矛によって修理固成せられ、濁れる水も清みかえり真の仁義礼楽のくに大和日本が再生するであろう。そして、それは同時に日本が世界的日本として湧出するときである。釈迦の予言せる闘争堅固時代末法万年の救世主として湧出する上行菩薩を日蓮として、他の宗教を排除し、日本神道を破壊せんとするのもある。日蓮及び其他は、皆上行菩薩の一家眷属の一員なのである。よく思いを潜め心を致して万古の心境を開拓し、日本本来の実相を知らねばならない。

私達は、日本建国に神の御意、宇宙の法則を見るのである。

梅花一輪、天下の春にさきがけて霜地に発くこの気節、先人がいたれる研究と叡智によって決められたる二月十一日を継承して、建国記念日、紀元節、祝日として全国民がその古を仰ぎ、その大理想と大雄心に燃え立ちたいものである。

幾年か　願ひ祈れど　かなはざる　紀元の祝日　今年こそ成れ

（三）日本宣言

――建国の理想を仰ごう――

（昭和四十二年二月）

雪霜を凌いで梅花一輪正に発かんとする時、二十年間の苦節に堪えぬいて甦り開く紀元の花の潔い馥りはまた一入である。

> 蒙くして以て正を養ひ、この西の偏を治しめす。皇祖・皇考、及ち神、及ち聖にして、慶を積み、暉を重ねたまひ、多く年所を歴たり。天祖の降跡りまして、以て今に逮ぶまで一百七十九万二千四百七十余歳なり。　――神武天皇御東征の詔――

正は誰が何時何処で行ってもさし障りのない道である。大学でいう絜矩之道である。「上に悪む所、以て下を使ふることなく、下に悪む所、以て上に事ふることなく、前に悪む所、以て後に先んずることなく、後に悪む所、以て前に従ふことなく、右に悪む所、左に交はることなく、左に悪む所、以て右に交はることなし。」の道で、物をはかるに矩（かねざし、

まがりがね）を用いて正しく平らかにするように、一つの曲尺でどんな広大な建物でも方正にするように、この道をもってすれば国も治まり天下も平らかにすることが出来るのである。

また、正は義で、人各々その時その処でなすべきことがある。父子親あり、君子義あり、男女別あり、長幼序あり、朋友信ありを五常五典または五偏の交りといい、更にわけて父は慈に子は孝、君は仁に臣は忠、夫は和儀に婦は貞順、兄は愛に弟は悌、朋友たがいに信なるを十義という。人は各々その義に率うて、己の私欲に克って礼に復することで一体の仁となるのである。元来一つの生命から分流した箇であるから対立した箇はその分に生きた時一体となるのである。男女別ありで男子が真に男子となり女子が真に女子となったとき男女一体となるのである。

かくて人の世は正しくして秩序が立ち、禽獣の私欲と闘争の世界でなく礼節の世界が出来るのである。禽獣と異なるところのない蒙昧である世に降臨（生誕・出現と解してもよい）したまうてからこの人倫の正しさを知らしめ養い来られたのである。

慶を積むとは徳を積むことである。正義は強い。然し愛と奉仕は更に尊い。「積善の家には餘慶あり」で、善をなし陰徳を積むことは自分と世の中とに慶びを積み福をきたらしめるのであり、正しさの上に喜びと感動と感謝のある世界である。

暉を重ねるとは、正義から奉仕、徳を積み心に慶が生じるに従ってその人は光が生じてくる。暉きが重なってくる。禍事罪穢を禊ぎ祓い清めた極に天照大神の光の世界が生じたように純粋に純粋にと努力するところ真（正）善（慶）美（暉）の世界が開けてくる。光明世界である。

この正を養い、慶びを積み、暉を重ねていくところに日本の道があり、精神があり、建国の理想がある。然してこれこそは宇宙の真実なる実相ではないか。

この精神に徹するが故にわれわれ人間を「ひと」（日止）といい、日子（彦）日女（姫）と名づけ、日嗣御子と称して

天業を恢弘し、天下に光宅するに足るべし。――神武天皇御東征の詔――

との詔となり

上は則ち乾霊国を授くるの徳に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘め、然る後、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇となさむ　――橿原奠都の詔――

の宣言となるのである。

あまつ日つぎは天業である。乾霊、天つ神の御業である。この道を恢弘して天下を光の家たらしめるのである。

我々がこの地上に生を授かった神の徳に答えたてまつり、皇孫が歴代正を養い慶を積み暉を重ねられたその天業の心を弘めて、六合を兼ねて文化の光（真・善・聖）の世界として、八紘を一家として、各個人個性の花咲き、各民族の文化の華開いて大調和せる五百箇御統玉の大和の世界、歓びに手に執るその五百箇御統玉がゆれるたまゆらに、玉と玉とがふれ合って発するその温くさやけく直き響のような人と人との触れ合いの大和世界を実現せんと

の宣言である。

世の人々よ！おん身達は呪詛と猜疑と怨恨と復讎と闘争の闇黒と破滅の共産党宣言を聴かんとするか。

養正と積慶と重暉の太陽「ひ」の道と結びの道を求めんとするか。

宇宙は原子核の強力な結びによって成立し、万物は光子エネルギーより生成する。

太陽と結びの道に順うものは栄え、反するものは滅ぶ。

醒めよ！

醒めて聴け!日本の宣言を！

附　　言

一百七十九万二千四百七十余歳を進歩的文化人や日教組達は荒唐無稽であるとし、古事記日本書紀は一笑に附すべきものとして滅却し去らんとしていたのである。が、一九六四年に英国の考古学者リーキー博士夫妻らが東アフリカのタンガニーカで一八〇万年以前の人類の化石を発見して、今までのジャワ原人六十万年前であった人類学の教科書を書き変えることになったとワシントン UPI＝共同が発表した。私は「日本神典これより明らかならん」とひの七十七号に書いたのであったが、去る一月十三日ケンブリッヂ（米マサチューセッツ州）AP＝共同は、「米ハーバード大学の比較動物学博物学館は、同館のバターソン教授がこのほどケニアのルドルフ湖畔の南東で約二百五十万年前とみられる人類の上はく骨の化石を発見した」と発表した。神武天皇の御存在を認めなかった考古学も最近は殆ど認めるにいたり、唯今のところ西暦前一世紀頃としているのであるが、これもまた日本書紀に書かれている西暦六六〇年前を認めるにいたるのではないかと思う。単なる考古学にのみよって断定して滅却し去ろうとすることの非科学的にして真実を冒瀆する厚顔無恥を悪むものである。古典を敬し、神話の真実性を知れ！